

銅造葉師如来坐像（金堂安置）

一 軀

光背裏面に丁卯年仕奉の銘がある

奈良 法隆寺

指定年月日 国宝（昭和二十七年三月二十九日）

修理年度 昭和六十二・三年度

補助事業者 法隆寺（生駒郡斑鳩町）

修理施工者 財団法人美術院

法隆寺金堂に安置される銅造葉師如来坐像の台座は、請花と反花を樟材から彫出するほかは檜の厚板を用いて簡素に組上げた宣字形座を上下二段に重ね、檜材の天板と八脚（各面二区の格狭間をつくる）からなる台脚に載せる。台脚を含めた下座と上框を除く上座との間には形体やプロポーション構成の明瞭な違いがあり、下座が飛鳥様式特有のスマートさとダイナミックな拡がりを感じさせるのに対し、上座は白鳳期の温雅な趣を示し、それは各框を彩る文様や腰部鏡板の絵画表現にも及んでいる。上座の上框は、さらに降る時期に当初の上框に替えて補作されたものと考えられる。

近年、彩色・漆塗部とも下地を含めて風化や浮き上がりが目につくようになるほか、前後に割離した上座上框が、柄で接合する腰部正背面の鏡板上部と共に僅かながら外方へずれ、台脚においても天板が荷重で大きくたわみ、脚の虫蝕朽損や割損も進むなど、構造上の不安を生じていたため、本鉢を仮座に移し、六十二年度に上座、六十三年度に下座及び台脚の解体修理を行なった。

解体の結果、台座の内側や矧面は製作時の鉄釘をはじめ符丁、当

たりの墨線に至るまで当初の状態が損なわれずに保存されていることが明らかになった。このため組上げには一部を除いて漆等の接着剤を使用せず、可能な限り元の鉄釘により接合し、原状のまま当初の保存を図った。腐蝕して使用に耐えない釘はもとの形に倣って新補した鉄釘に替え、漆で錆止めして打付けた。

修理の過程では、厚さ二センチ程の鏡板のみによって大きな荷重を支える丈高い下座腰部の補強も検討された。上框下面から下框上面に至る中枠を組み、鏡板への荷重を軽減することが一案として考慮されたが、荷重を外へ拡散するよう工夫された下框の構造の均衡を崩すおそれがあるため、腰部の補強は行わないことにした。また鏡板の割れに生じた隙間は檜材の薄板と木屎漆で埋めるのが通例であるが、この修理では剝落や変色の甚だしい鏡板表面に修理古色の部分加わる煩わしさを避ける意図から現状のままとした。

上座の腰部は鏡板上面に作り出す正背面各二、両側面各一の柄で上框と接合するが、この腰部以下と上框が修理前には前後を置き換えて接合され、上框下面と鏡板裏面に墨書された「一」「二」の符丁も一致していなかった。本鉢の懸裳に被われていた背面（修理前の正面）は彩色の焼けが他に較べて少ないところから、この置き換えはかなり以前に行われたと推測されるが、割離した上框を接合して上座の構造上の不安を解消するには柄を正しく納める必要があると判明したため、法隆寺の了解のもとに腰部以下は、前後の向きを改めた。腰部鏡板に描かれた図様から従来より同様の置き換えがされているとの指摘があった下座も、修理前の背面（北）側に製作時のものとみられる「前」の墨書、近世以降の「葉師南方」の墨書が認められたことから、修理完成後は従来の背面を正面にして安置され

ることになった。従って修理記録とここでの各面の表記はそれに拠っている。

法量、形状等

法量

単位 cm

	高	幅(最大)	奥(最大)
全高	一八四・三		
上座全高	五三・五		
上座	四・九	六七・八	四八・二
腰部	三二・一	四八・一	三四・〇
下座全高	一六・五	八四・二	六八・二
上座	一一〇・四		
腰部	一三・一	一二五・六	一〇八・五
下座	八一・八	八九・五	七三・七
腰部	一五・五	一三四・九	一一八・四
下座	二〇・四	一五二・九	一三五・〇

形状

二重宣字座 台脚付

上座 上座一段。腰部、鏡板及び縦框。蕊、反花複弁二段、下座二段。

下座 上座二段、請花二段。腰部、鏡板及び縦框。蕊、反花二段、下座二段。

台脚 天板、八脚(各面二区の格狭間をつくる)。

品質構造

檜材(反花及び請花樟材) 彩色・漆塗

上座 上座一段。鏡板は正背面各縦一材の間に両側面の各縦一材を矧ぎ、上下に正背面各二、両側面各一の柄を造り出す。縦框は各隅L字形縦一材製。蕊、各面一材製、鏡板に矧付。反花、下座一段、同下段、各四方矧寄せ(下座各段は矧面に留柄を造り出す)。

下座 上下各段は内側で相欠き状に組む四方矧寄せとし、上座一段の内側に天板前後二材を張り、請花(四方矧寄せ)を矧付け、鏡板に柄を造り出さないほか、上座に準ずる。

台脚 天板は横一材の後方に一材を矧足し、木口にあたる両側面に端喰を入れる。八脚各横一材製。

表面は上下座とも鏡板、反花、請花、蕊を白土下地彩色とし、上座、下座、縦框、台脚は錆下地漆塗の上、色漆で文様を描く。

損傷状況

1 虫蝕朽損が上座下座、台脚部の天板及び脚等に認められた。

2 彩色と下地が全体に風化し、彩色・漆塗部とも下地が材より剝離する箇所があった。

3 矧目が離れ、鉄釘が腐蝕していた。

4 上座の上座が前後に割離して柄で接合する腰部正背面の鏡板上部と共に外方にずれ、構造に不安を生じ、縦框の割損が進行していた。

5 下座の上座上段、背面割損部の接合に目違いがあった。腰部の鏡

板、縦框に干割れがあり、材の収縮により隙間が生じていた。下座と台脚の各天板、上下座の反花、下座の請花の各矧目の間も材の収縮により開いていた。

6 台脚の天板が荷重でたわみ、そのために八脚にかかる荷重が偏っていた。脚の一部に割損するものがあり、崩壊が懸念された。また前後の天板の矧目と端喰の矧目に目違いが生じていた。

### 修理の概要

1 エキボンガス（臭化メチル＋酸化エチレン）による燻蒸を修理に先立って行なった。台脚等の虫蝕朽損部は、アクリル樹脂（パライド B 72・溶剤トルエン）を浸透させて硬化し、木屎漆を充填した。

2 彩色・漆塗部の剝落止めを水性アクリル樹脂（バインダー17）を用いて行ない、漆塗の地下から浮き上がる部分はアクリル樹脂エマルジョン（プライマル AC 34）で接着した。

3 上座の下框二段及び反花の一部、下座の上框二段を除く各部の矧目を解体し、強固に組付けた。よく保存された当初の状態を損なわぬよう上座の蕊及び反花の一部を漆で接着した以外は現状のまま接着剤を使用せず、可能な限り元の鉄釘により接合した。腐蝕して使用に耐えない釘は当初の形に做って鉄釘を新たに作り、漆で錆止めし、もとの釘痕に打ち付けた。下座の上框及び請花の各隅の矧目は、腰部との関係でつめることが出来ないため、隙間を檜材の薄板で埋めた。

4 上座の腰部以下の向きを変え、修理前の背面を正面として上框下

面の枘穴と腰部鏡板上面の枘を正しく合わせ、前後に割離した上座上框を漆で接着した。縦框の欠失部は補足しなかった。

5 下座の上框背面の割損部は一旦取り外して目違いを正し、漆で接合した。下座及び台脚の各天板の矧目に檜材を矧足して材の収縮による隙間を埋め、補強を図った。台脚天板の歪曲は無理のない範囲で矯正し端喰との目違いを修整した。

6 台脚部を補強するため、各檜材黒漆塗の前後に通る中棧三本を天板下面に新補し、これを受ける束を各脚裏面に新補した。

7 修理箇所は古色仕上げとし、修理記銘札は新補中棧に打付した。

### 修理にともなう発見

#### 墨画

飛天と樹木等を闊達な筆致で描いた下描き風の墨画が下座背面の腰部鏡板裏面にあることが明らかになった。墨画は鏡板の左下部に左辺を下にして描く。飛天図はおよそ縦二〇、横一四センチ、樹木図は縦三四、横二四センチ程で、これを対角線に配置して縦四五、横三五センチ程の画面を構成する。

右上方の飛天は右向き。長い頭部の頂に髻と結紐の便化とみられる三弁形を表わし、開いた口から三支のパールメットを吹き出す。弓なりに反らした軀軀には前で合わせる長い衣を着けて帯を結び、長い袖や裾、天衣を後ろ上方に軽やかになびかせる。両臂を屈して両手をひろげ、右膝を前に出し、両足をあらわす。

左下方の波形をなす土坡には、根元で僅かに交差する双樹三対が立つ。中央の一对は大きく、両脇の二対は遠景のように極端に小さ

い。節の描かれた平行する幹から刺状の技を出し、大樹左側の技先に六弁の花とパルメットで構成する心葉形の垂飾とを付ける。小樹二対には稲妻形の樹葉を添える。

飛天の図様は、法隆寺献納宝物中の甲寅年(五三四)または五九四の銘文がある銅造光背にめぐらされた飛天などよりも中国江蘇省丹陽県の南斉景帝肅道生墓とされる陵墓内に表わされた飛天に近い。類例の知られていない樹木とともに中国南北朝時代の形制を伝えるものと考えられよう。下座正面鏡板に描かれた飛天絵の下絵との見方もあり、今後の詳細な研究が待たれる。

下座左側面の蕊には、彩色の下に柔らかな墨線で描かれたパルメット、雲形等があり、画工の手すさびと思われる。

#### 符丁等

墨書による符丁が記されていた。上座腰部の鏡板裏面と上框下面、下框上段上面との近接する位置に「一」「二」「大」「用」、下座腰部の鏡板裏面と上框下段下面、下框上段上面との近接する位置に「長」「六」「前」、台脚天板及び端喰各剝面の接合する位置に「大」「七」「八」等が認められた。組付けに用いられたものであろう。

「悲悲」「人人」「心口」の文字が下座の上框下段下面に書付けられていた。この面に矧付けた請花の彩色に用いるものと同じ白緑によるものである。なお、この面には近世以降の書体を示す「葉師南方」の墨書もあった。

#### 銅造螺髪等

上座下框上段の柄穴に銅造の螺髪二個と小蓮弁一枚が遺されていた。た。

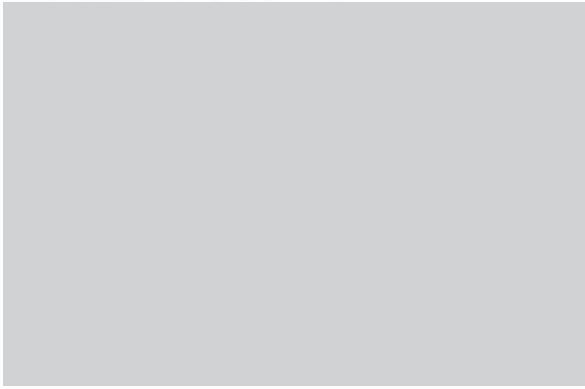
螺髪は高七、径九ミリと高五、径八ミリのもの各一個。いずれも

中空で厚さ一ミリ程。鑄造し、表面は白土下地の群青彩とする。葉師如来像本鉢の現状は素髪の頭部には螺髪植付けの痕跡があり、この螺髪はその貴重な遺品の可能性が高い。

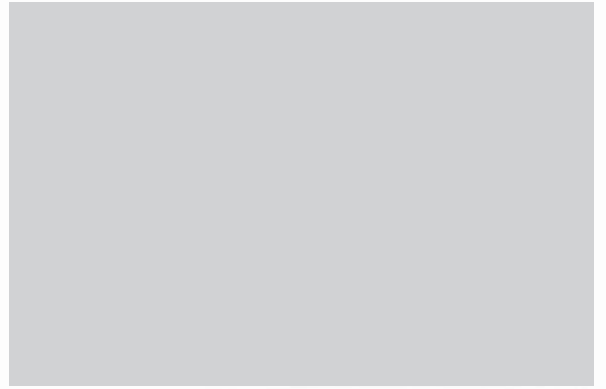
小蓮弁は長二六、幅一五、厚三ミリ。銅製鍍金で、もとのところに丸孔を穿つ。天蓋より落下した飾り金具とみられる。

これらは檜材製の箱に入れ、上座内部に納めた。

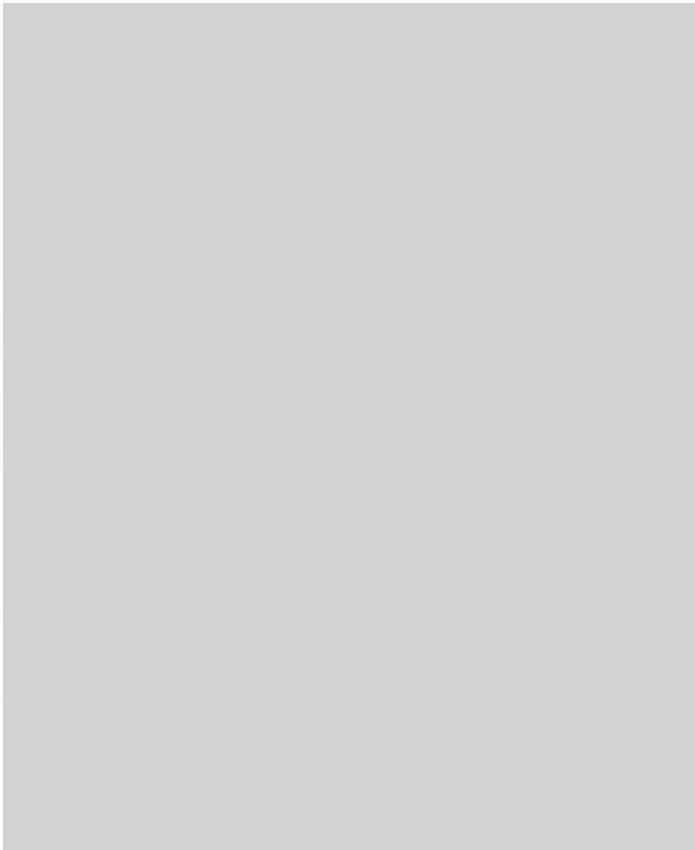
(文化庁文化財保護部美術工芸課 中村康)



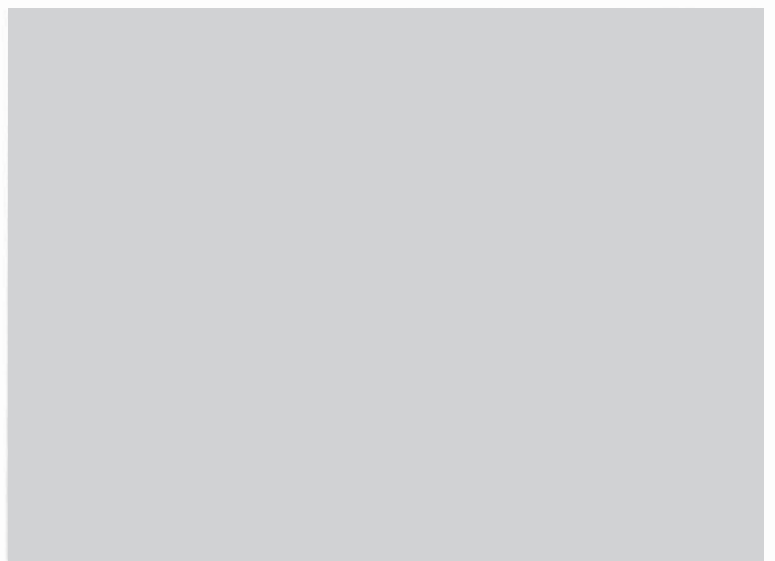
上座完成



上座修理前

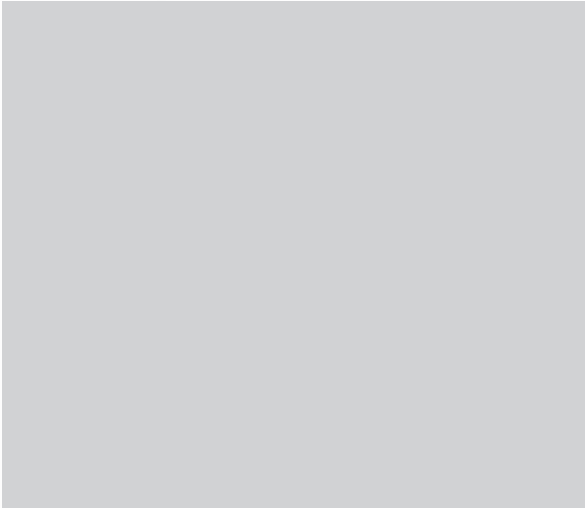


上座解体

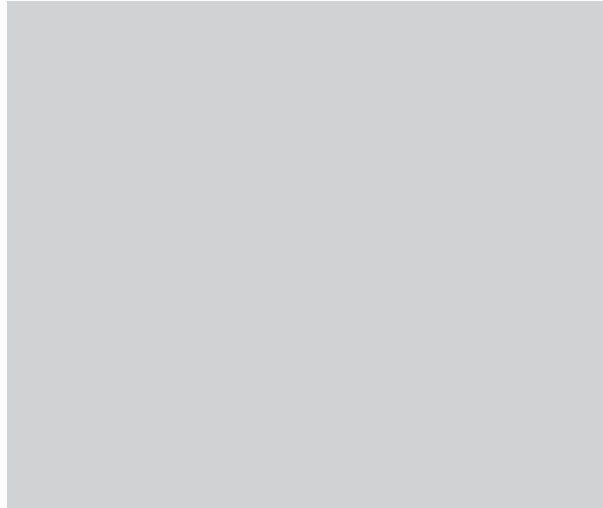


上座解体

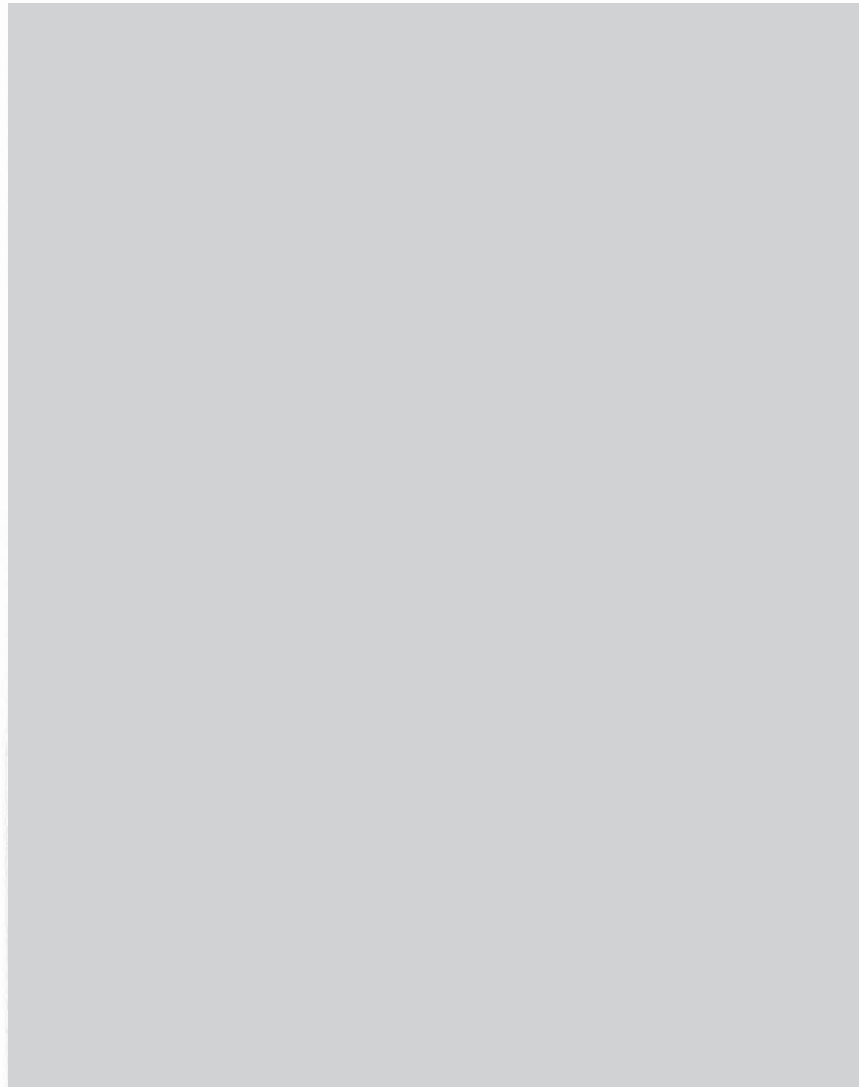
藥師如来台座 法隆寺藏



下座・台脚完成



下座・台脚修理前



下座・台脚解体